第６章　吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑤

元おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

第五節　「おふでさき」に哲学思想があるか

笑いを忘れないように、憎んだり恨んだりせずに、陽気に暮しなさい、神はいつでもこう言ったことが真理であることの根拠がありうるとすれば、それは何によるのだろうか？《既存の宗教組織の真の「復元」か、社会・国家体制の改革によるのだろうか？》

それはどれだけの力で、あらゆる知的に考慮された理念と拮抗できるのか？　それは何によって拮抗できるのか？《世界の外質的天理教化か天理教の内質的世界化か？》これらの問いは《教内・教外者にかかわらず》依然として謎であると言える。

吉本の『思想のアンソロジー』（《　　》内筆者追記）における最終章・中山みき「おふでさき」は以上の文章で締めくくられている。しかし、吉本はこの文章が出版された約半世紀まえには、すでに高橋和己著『邪宗門』のテーマの根底を同著の巻末論文（643～649頁）に民俗社会学から論じた「新興宗教について」という論考において天理教を主としてとりあげ、その思想的核となる天理神の「十全の守護」と「元の理」の全文を引用し、天理教の基本教理の独自性を紹介している。その解説本文を吉本が問題とするこの文章の「謎」解きのために引用しておきたい。他の学際的領域からの発言や関係論考については「元の理」講座全七巻（天理やまと文化会議、1987～1997年）や、拙著『中山みき「元の理」を読み解く』（日本地域社会研究所、2007年）の「あとがき」（597～603頁）をご参照いただきたい。

吉本はまず「新興」という言葉の意味の問題を土俗学、つまり民族社会学から解析し、「中山みきの入眠体験から演繹された宗教的な本質とその段階は、みきが〈親神〉とした天理神の性格づけと、天地創造神話によってとらえることができる」として、天理神（天理王命）のくにとこたちのみことから始まりいざなみのみことまでの十全の守護を『天理教教典』から引用したのち次のように解説している。

> 〈空間的方位〉概念と人間の〈身体〉性と〈世界〉の総和の概念とを対応づけている垂加的な神道理念の影響をのぞけば、中山みきが一種の綜合的な一般神を人格化して設定した天理神の概念は、〈性神〉の概念と〈農耕神〉の概念とをむすびつけたものであることがわかる。そして女性の神憑り体験以後の立言を教義的な原典として創始された土俗宗教〈新興宗教〉が遡行しうる時間性は、大なり小なり中山みきがしめている領域に包括されるといっていい。この時間性は、農耕社会の起源の時期まで遡行できるもので、この段階では制度的には国家以前の〈国家〉、いわば血族の共同性を基盤とする集落国家しか想定することはできない。

ここで吉本のいう「垂加的な神道理念」とは、江戸初期に山崎闇斎が提唱した神道説で、儒教や特に朱子学や吉田神道・伊勢神道などを集大成した独自の思想を指している。天照大神と猿田彦神をもっとも崇拝するとともに、『日本書紀』を重視し、儒教的なつつしみを意味する徳や天と人との融合を説き、陰陽五行の理と易敬窮理の説を調和し組織して、神道の核心は皇統の護持にあるとする理念である。〈性神〉と〈農耕神〉という二つのキータームを軸に『古事記』を大和王権（天皇制）の宗教的な教義書として読めば、そこには「〈農耕神〉の概念は存在するとしても、〈性神〉信仰の概念は想定できないとし、時間性としては、中山みきがしめている天理神よりも新しい時間性の段階にとどまっている」という。つまり、天皇制の宗教的本質と新興宗教とは本来的には並び立つことはできないという吉本の見解は卓見であろう。中山みきが立教以来、地元警察署による10数回の投獄や神道本局からの度重なる制約を受け、第二次世界大戦敗戦後、教団が信仰の自由を初めて獲得するまで教理を教えられたままに説けなかった理論的根拠はこの点にあった。

吉本はつづいて中山みきの天地創造神話を『古事記』に記載された大和王権の天地創造説話と異なっているのは当然であるとして「元の理」の全文を『天理教教典』から引用し、『古事記』の天地創造説の概略も現代文訳で紹介している。その説話を比較すれば、天皇制神道理念と天理教教理の二つの神話が独自の「思想」的源泉として隠しもつ、吉本のいう「蒙昧性」と「多様性」との質的相違が歴然としていることがわかる。その差異は天理教の創造神話が〈人間創造神話〉であるに対して、大和教（天皇制）の創造神話が〈国土創造神話〉であることであるとし、天理教の発生が大和王朝と同じく、もともと海とそれほどかかわりの無い奈良盆地であるのにもかかわらず、その〈人間創造神話〉が中山みき にとってなぜか魚類の比喩によって貫徹されていることに不可解な気がすると疑問を呈している。吉本は「中山みきには個人として特殊にそういう嗜向があったのかもしれない」と問題をいともあっさりと解消しているが、実はその不可解性の中に天理思想の哲学的核心となる基盤があったのである。吉本が蔵内数太著の『泥海古記について―中山みきの人間学』（1979年）や『講座「元の理」の世界』全七巻（1987～1997年）に眼を通していたならば、『思想のアンソロジー』の最後の疑問は、あらたな思想的展開の出発点になったのではないかと思えて非常に残念至極であった。吉本はこの不可解な〈元の理〉における魚類比喩の頻出について間接的に次のように述べている。

> これを天理教神話が〈性神〉信仰の段階にあることをかんがえあわせると、教義的な時間性がしめしているものは、大和教〈天皇制〉よりも古く、また土俗的であることが了解される。そしてまた、天理教にとって〈国生み〉の神話は無意味であった。かれらにはもともと国土支配の現実的な意企はなく、〈性〉信仰に基盤をおいて、農耕社会の貧困な人間の心的な世界を救済しようとする意企しかなかったからである。
>
> 中山みきにとってもっとも重要な緊急な問題〈急き込み〉は、天理神の概念に包摂され、現実的な無一物の状態でもなお成立する〈陽気ぐらし〉、いいかえれば宗教的な解放天国（法悦）の生活であった。そのための条件として宗教的な奉仕と一定の勤行が要求される。（中略）この宗教には本質的な意味での政治的権力への志向はないといっていい。ただ教祖中山みきには、かなり高度で深刻な生活思想があり、その発言（おふでさき）に普遍的な思想体験としての一般的な真理が、かなり高度に存在している。（中略）しかも、その発言が、常人ではとても及ばない無鉄砲な徹底した自己放棄に実践的に裏付けられているため、おおきな影響力をもっているといっていい。しかしここでは天理教のその面に言及するつもりはない。

「その面に言及するつもりはない」という断り書きは、吉本は「おふでさき」の思想が力を持ち得るのは、それが筆者である教祖の「ひながたの道」と二つ一つであることを指摘しているのであって、そこには中山みきの普遍的な高度で且つ深刻な生活思想と一般的な真理が存在していると認識しながら、その要素を抽出し普遍的哲学を構築するのは天理神を信奉し、教祖の「ひながたの道」をたどるべき信仰者たちに与えられた固有の栄誉ある使命であり、信仰者でない自分にはその義務や資格はないと伝えているような気配がする。

ちなみに吉本隆明は雑誌『遊』（1982年9月特大号、工作舎）において、編集者松岡正剛と革新的な特集「日本する」と題した対談を行っている。松岡が『遊』を創刊したのは1971年のことで、それはマラルメとベンヤミンのせいだったと、『kotoba』（集英社2016年秋号）でその経緯を回想している。吉本の対談では、吉本が歴史を超えるための基本的古典として時代を追って25編をえらんでいるが、それは太安万侶撰録『古事記』にはじまり、12番目に中山みき『みかぐらうた・おふでさき』（村上重良校注、平凡社東洋文庫）があげられていた。吉本の主張したい『思想のアンソロジー』の課題の核心を、南方熊楠の「事の学」における曼荼羅思想を梃子にその展開を考えていたが、本誌3年間の連載内においては、そこまで至らなかったのが残念であった。せめてその思いだけでも読者教友に遺して追記しておきたい。